

高きに登る 杜甫

風 急に 天 高くして 猿嘯^{えんしょう} 哀し

渚 清く 沙 白くして 鳥飛び 廻る

無辺の 落木 蕭蕭として 下り

不盡の 長江^{こんこん} 滾々として 来る

万里 悲秋 常に 客と 作り

百年 多病 独り 臺に 登る

艱難 苦だ 恨む 繁霜の 髪^{びん}

潦倒 新たに 停む 濁酒の 杯

注：蕭蕭ものさびしい 落葉のざわざわ音 潦倒老いぼれる おちぶれる

近頃80歳になると、この漢詩が身近に感じ、最も良いと思っていた。杜甫（七一二～七七〇）盛唐の優秀なる詩人である。李白の詩仙に対して、杜甫は詩聖と呼ばれる。

昔中国では、旧暦九月九日の重陽の節句に小高い山や丘にのぼり、酒に菊の花びらを浮かばせて飲む風習があった。この詩は767年9月、多病で酒もやめ、56歳の時、ただ一人高台に登って作る。唐詩選に所収され、古今の七言律詩中の第一と評される。

この時期、日本では大仏開眼供養があったり、鑑真和上来日があり、「万葉集」最新歌出たりした時期である。1245年も前のことなのに感覚・考え方は自分のことのように感ずる。

大学時代から山に登る事ができたこと。よき先輩に恵まれたこと。自分は幸運だった。

大学3年時の夏山合宿を穂高岳で、一週間前穂岳で岩登りをしてから、剣岳まで45日間縦走した。自分はいつも先頭だった。愈々最後のキャンプ地に辿り着くべく剣岳の三の窓岩場の急斜面をゆるゆる下り、あと一步踏み出し雪溪に取付こうとした瞬間、1.5ヶ月間分のキスリングザック背負ったまま10m、頭を下に回転しながらベルグシュルンドの底に落ちていった。S33年当時は、ヘルメットは無かったし装着しない。歯がガクガクし、身がぶるぶる震えながらその場にうずくまる。自分は、いったいどうしたんだ。何をしたのだ。神様が助けた。2年生の兼光が降りてきてキスリングザックを背負った。幸運としか言いようがない。生涯付きまとう悪夢だった。

山登りが出来たことは、一生の宝を得た事だ。登ることで活力が湧き、山頂では心が空っぽになる。忍耐力が出来た。健康に気を付けるようになった。自然と接触することで癒しの気を体感出来ることだった。